



文化財つれづれ

氷川町内の文化財を紹介するコーナーです。

毘沙門天像（町指定文化財）

毘沙門天像は、北野津公民館の敷地にあります。毘沙門天とは仏教を守る神の一つで、北方を守る神です。鎧・兜をつけ、左手に宝塔、右手に矛を持ち、足元は邪鬼を踏みつけた武装忿怒（武装して怒っている）の格好をしています。像の高さ約150cm、両脇に吉祥天女と善貳師童子を配しています。

木材は楠で、頭・胴などを別々に作る寄木作りです。像の背部に墨で「応長元年二月吉日、施主大炊甚兵衛、釈尼師童子、奉納色毘沙門天王、吉祥天女」の銘があります。応長元年は1311年で、鎌倉時代の終わりごろに当たります。しかし、彫刻様式からすれば「応長」ではなく、「慶長」の間違いではないかと思われまます。それでも慶長元年は1596年に当たり、今から約400年も前になります。

その後、毘沙門天も脇侍も改修されていますが、全体としてよく残っており、おそらく氷川町に残っている木像としては最も古いものの一つではないでしょうか。



▲毘沙門天像

【お問い合わせ先】 氷川町教育委員会 生涯学習課 ☎52-5860

新着図書

| 一般書 | 児童書 |
|------------------------------|--------------------------|
| 雪の階 奥泉 光／著 | えほん東京 小林 豊／作 |
| 黄泉がえりagain 梶尾 真治／著 | ぼくはくまですよ フランク・タシュリン／作 |
| 即動力 田村 淳／著 | あいうえおべんとう 山岡 ひかる／作 |
| 迷路の外には何がある？ スペンサー・ジョンソン／著 | おぼけによぼう 内田 麟太郎／文 |
| ミッキーマウス90のひみつ 講談社 | 満月の娘たち 安東 みきえ／著 |

開館時間

平日 10時～18時
木曜 10時～20時
土日曜 10時～17時

休館日

月曜・祝日
※詳しくはスタッフにお尋ねください。

八火図書館だより

新年度がスタートして早一ヶ月、爽やかなそよ風が心地よい季節になりました。

おかげさまで、八火図書館も勉学に励む学生や、読書を楽しむ一般の方など多くの住民の皆さんに利用していただけるようになりました。

また近年は、町内だけでなく町外からの利用者も増えて

おり、大変嬉しく思っています。

今年度もいろんなジャンルの図書を揃え、利用者の皆さんの多種多様なニーズに応えていきたいと考えています。たくさんのご利用お待ちしております。

【お問い合わせ先】 八火図書館 ☎62-3489 <http://www.hikawa-lib.jp/info/hakka/>

町民文芸

短歌

宏大な兼六園に草臥くたびれて
茶室に座り癒しを味わう
北野津 宮本 末秋

ほととぎす鳴くや氷川の菖蒲あやめくさ草
不知火恋ひて火の君も泣く
北野津 井田 道寛

集団で金の玉子とはやされて
行った子も古希白髪まじりて
西野津 古崎スエノ

花香る彩る鮮む風光る
朝一時吾の和むたる
西野津 古崎 栄子

穏やかなお顔見れし平成の
継ぎて生くる道しるべ
南鹿野 尾崎 京子

山裾の老人ホーム廢屋の
桜満開数多のメジロ
西上宮 村内 一誠

万札の使い出の無さ崩したら
羽根を生やしてアツと云う間に
吉本 橋村 正之

俳句

友見舞ふ桃の花たふ愛し名の
老人ホームの室の明かるき
吉本 高橋 澄子

彼我の世に人去りてゆく蝌蚪かたとの水
発心の夢謝して生きゆく
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

人は日々何かを掴み失いて
自然の中の己を覘てる
上鹿島 前村 俊子

菜虫這う丹誠込めし庭野菜
北野津 宮本 末秋

菖蒲しょうぶの日大和男子やまとをのこの空青し
北野津 井田 道寛

桜咲く彼岸の夫も見てるかな
西野津 古崎スエノ

新緑の天に伸びゆく紫もくれん
南鹿野 尾崎 京子

水すまし日ましにふえて谷せまし
町 香山菊童子

春雨やしとしと拝む彼岸供養
西野津 古崎 栄子

春市や就職決まりし孫と行く
吉本 高橋 澄子

天遊の白雲くもを散らして春の鶯とび
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

朝桜天まで満ちて散り初めぬ
桜ヶ丘 吉田 照子

風抱いてこよなき空の花吹雪
桜ヶ丘 宮崎トシ子

峯雲や白妙のすそ花万朶ばんだ
町 田中 澄子

ついでホオジロさえず囀る散歩かな
西上宮 村内 一誠

満潮の流れ静かや鳥は群
上鹿島 前村 俊子

投稿について

・楷書で記入し、漢字には全て読みがなをふって投稿してください。
・内容確認する場合がありますので電話番号を明記してください。
・毎月8日必着
※遅れて投稿された場合掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。

投稿先

〒869-4814 氷川町島地642番地
企画財政課 企画係 ☎52・5850

漱石と家族と「漱石山房の人々」

手探りで Denier Memoir

法道寺 本田 花風

金子「キーンさんは先生だと思っています。(源氏物語)から三島由紀夫とも交流、明治から大正にかけて書きながら、なぜ漱石はお書きにならないのだろうか。」キーン「これから長く生きてら書くかもしれませんが、漱石はそう簡単に書ける作家ではないと感じています。初期のユーモラスなものから(草枕)のように詩的なもの、まで後期の写実的なものまで幅広く一通り読みましたが、自分の中にまだイメージができていません。」金子「医者だった親は漱石全集と揃えていて、それを読めと言われ、(三三郎・坊ちゃん・吾輩は猫である)などは楽しく読んだ。(それから・門・彼岸過迄)に進むと、自我の問題に入ってくる。中学の青年には面白く読めなかった。近代という時代に入り、自己中心的な考え方が広がり、自我ばかりが募ってくる。漱石はロンドンでも自虐的な生活をしていて、非常に自我の強い人だったと思う。その自我の強さに、にっちもさっちもいかない状態で漱石は死んだのだと思う。日本の近代化に疑問を持っていた、非常にややこしい男です。」「キーン」漱石は過去を否定しませんでした。漱石は過去、現在、そして未来まで、複雑に考えていたと思います。以下省略」新聞一ページに上る二人の対談は複雑だ。キーンが登場すれば一安心する。